

# 日・韓両語の色彩語「クロ：까망」の語彙分化

權 寧 成

(2002年9月30日受理)

## Morphological Derivations in the Color Term “Kuro: Kamang (Black)” of Japanese and Korean Languages

Kwon Young-Sung

This study focuses on the color term “black” which is called “kuro” in Japanese Language and “kamang” in Korean Language. As a result, it is found that there is a significant difference in the structure and lexical system of the color term of both languages. Especially in “kamang” of the Korean Language, its derivative words and compound words not only indicate the luminosity, but bring about various meaning changes as well.

Key words: Color Term, Meaning changes, Morphological Derivations

キーワード：色彩語，意味変化，語彙分化

### 1. はじめに

韓国語色彩語の場合，基本色彩語の数においては，日本語との差はそれほど見られない<sup>1)</sup>。しかし，派生法（→派生色彩語）・合成法（→合成色彩語）といった語形成によって作り出された複合色彩語は，日本語に比べて，はるかに多い<sup>2)</sup>。

韓国語色彩語の形態的・意味的特徴に関しては，かつて日本の研究者（青山1966）によって研究されている。韓国外で韓国語色彩語の研究が先に始まったということは，氏の論文でも述べられているように，「同じ色相を表現する語に於いて，色彩の程度を強調する方法がいくつもあるというのは一体どうしたことであろうか」（青山1966：344）といった，日本語色彩語と異なる韓国語色彩語の複雑な語彙分化に興味を持ったからであろう。

金/千（1971）は，色彩語の豊かさは，韓国語母語話者（以下，韓国語話者）にとって，色彩語の基本形では十分に言い表せない明度・彩度に関する感情表現

を，より細かくする働きをすると述べている。ここで言う感情表現とは，必ずしも明度・彩度といった色の度合における感情表現のみを指しているとは限らない。

しかし，従来の色彩語研究の多くは，明度・彩度といった色の度合にだけ注目し，諸複合色彩語の意味を明度・彩度別に分類していくことに止まっていたと言わざるを得ない<sup>3)</sup>。

その原因は，色彩語を主に色相の区別体系としてのみ捉えていたからであろう。このことから，従来の研究では各複合色彩語の明度・彩度以外の意味用法，あるいは語彙的機能については，それほど重要視されてこなかったのである。

基本形から分化してきた複合色彩語が，基本形では十分に言い表せない感情表現を，より細かくする働きを持つということは，言い換えれば，意味用法上，基本形では形容できない感情表現を果たすために，あるいは語彙的機能を果たすために，作り出されてきたとも考えられるのである。

本研究では，韓国語色彩語の基本形から分化してきた各複合色彩語の意味を探っていくことによって，基本形とは語彙的機能及び意味用法上，どういった違いが見られるかを究明し，さらに，日本語色彩語との対照の観点からも考察を進めていくこととする。

本研究では，他の色彩語に比べ，語彙分化がもっと

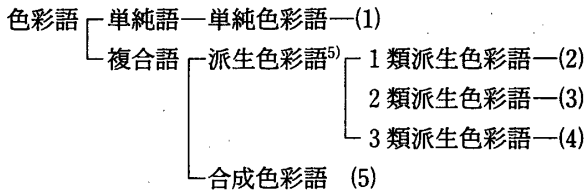
本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：町 博光（主任指導教官），水島裕雅，  
多和田眞一郎，江端義夫

も活発である(姜 1985)とされている「까망(クロ)」に限ることとする。

## 2. 韓国語色彩語「까망」の語彙分化の特徴

本研究では、韓国語色彩語の語彙構造を、下記のように分けることにする<sup>4)</sup>。



(1)単純色彩語は、「검 다 (黒い): 平音・陰性母音(以下, 陰)」「감 다 (黒い): 平音・陽性母音(以下, 陽)」「검 다 (黒い): 濃音・陰」「감 다 (黒い): 濃音・陽」のように、1つの語基を持つ色彩語を言う。このうち、平音・陰の「검 다 (黒い)」のみが基本形色彩語である。

(2)1類派生色彩語は「거 멀 다 (黒い): 平音・陰」「가 말 다 (黒い): 平音・陽」「꺼 멀 다 (黒い): 濃音・陰」「까 말 다 (黒い): 濃音・陽」のように、基本形色彩語「검 다 (黒い)」に接尾辞「말/멀<sup>6)</sup>」が付いて派生したものを言う。

(3)2類派生色彩語は「시(/섯)꺼 멀 다 (真っ黒い): 濃音・陰」「시(/섯)커 멀 다 (真っ黒い): 激音・陰」「새(/셋)까 말 다 (真っ黒い): 濃音・陽」「새(/셋)카 말 다 (真っ黒い): 激音・陽」のように、1類派生色彩語(中でも濃音から成っている派生色彩語のみ)や、激音のある語(커 멀 다/카 말 다: この形ではまだ色彩語ではない)に接頭辞「시/섯・새/셋<sup>7)</sup>」が付いたものを言う。

(4)3類派生色彩語は1類派生色彩語に付いている接尾辞「말/멀」以外のものが付いて派生したものである。こういった色彩語の語基に付く接尾辞は、青山(1966)の分析によると、22例に上り、基本形色彩語「까망(クロ)」に付くものは13例であるとされている。

(5)合成色彩語は、語形成において、下記のように、3つのパターン(羅1995)が見られる。

①単純色彩語同士の結合:「검 붉 다(直訳:黒赤い)」「검 푸 르 다(直訳:黒青い)」等。

②色彩語と擬態語との結合:「가 마 반 드(/치)르 르 하 다(黒くすべすべしている)」等。

③重複形式—「가 뭇 가 뭇(黒々): 平音・陽」「거 뭇 거 뭇(黒々): 平音・陰」「까 뭇 까 뭇(黒々): 濃音・陽」「꺼 뭇 꺼 뭇(黒々): 濃音・陰」。

とくに語彙分化の際、下記のように、音声象徴(日

本では音象徴と言う)による音韻交替が、ほとんどの単純色彩語と複合色彩語に一貫して働いている。

\*母音交替(陰性/陽性)、子音交替(平音/濃音/激音)

音声象徴(母音交替/子音交替)による色彩語の語彙分化は韓国語色彩語が日本語色彩語と区別される大きな特徴の1つである。日本語の場合、母音交替・子音交替、つまり音声象徴による対立が一番著しく見られる語彙はオノマトペである。もちろん、韓国語においてもオノマトペの音声象徴は著しい(青山 1977, 菅野 1986, 野間 1998)。

言語を問わず、音声象徴が一番著しく現れる語彙はオノマトペである。しかし、韓国語の場合は、オノマトペでないにもかかわらず、音声象徴による語の対立が一番著しく見られる語彙は、色彩語彙である。ここに、韓国語色彩語の語彙分化における特徴が見られるのである。

以上見てきたように、韓国語色彩語の語彙構造は日本語のそれに比べて相当複雑であり、とくに、音声象徴が語彙分化の全般にわたって、均一にかつ相当の影響を及ぼしているということが分かる。こういった諸複合色彩語は、ほとんど、日本語への直訳は不可能である(意識も容易ではない)。なお、複合色彩語は相当の量に上るので、それほど使われていない色彩語もあると思われる。韓国語色彩語の語彙分化の全貌を把握<sup>8)</sup>していくためには、これらのすべてを取り上げる必要があるだろう。

本研究では、基本形色彩語から語彙分化されてきた諸複合色彩語の位相的变化を見ていくものである。比較的客観的な意味分析が可能であると思われる色彩語<sup>9)</sup>を取り上げ、音声象徴による観点からも考察を行っていくこととしたい。合成色彩語では、上記の(5)の②を、主に扱う。

車(1990)によると、漢語色彩語については、日・韓両語の表現上の共通点が多いとされているので、本研究では取り扱わないことにする。

## 3. 韓国語の複合色彩語にみられる意味用法

### 3.1. 語レベルにおける意味変化の様相

#### 3.1.1. 語基の母音交替による意味上の違い

「까망(クロ)」における母音交替は陽性母音/a/と陰性母音/ㅏ/のみである。

①「거 멀 다: 平音・陰」 ②「가 말 다: 平音・陽」

③「꺼 멀 다: 濃音・陰」 ④「까 말 다: 濃音・陽」

上記の色彩語(すべて、「黒い」との意味)は陰性・陽性母音の対立<sup>10)</sup>によるもので、大体陰性母音は大き

いものを形容するとき使われており、陽性母音は小さいものを形容するとき使われる傾向がある。このことは、人間に対しても同様である。下記の⑥⑧は⑤⑦に比べ、体（あるいは顔）の大きい人を対象として使われる場合が多い。

⑤가 무잡잡하다 ⑥거 무접접하다

⑦까 무잡잡하다 ⑧꺼 무접접하다

：共通する意味は、(顔が) 浅黒く汚らしい

これについては、以下(3.2.)で、より詳しく見ていきたい。

### 3.1.2. 語基の子音交替による意味上の違い

「까망(クロ)」における子音交替は、平音/ka(가)/や濃音/k'a(까)/や激音/k'ha(카)/による。

①～④：上記(3.1.1.)の①～④と同様

⑤「시(/ㅅㅣ)꺼 멀다(真っ黒い)：濃音・陰」

⑥「시(/ㅅㅣ)커 멀다(真っ黒い)：激音・陰」

⑦「새(/ㅅㅐ)까 망다(真っ黒い)：濃音・陽」

⑧「새(/ㅅㅐ)카 망다(真っ黒い)：激音・陽」

平音→濃音→激音といったように、左から右のほうに変化するにつれ、語義が若干強調されていく(青山1991)。一方、子音交替によって、次のようなニュアンスが生じてくる場合もある。

⑨가 무잡잡하다 ⑩까 무잡잡하다

：(顔が) 浅黒く汚らしい

⑪가 마반드(/ㅈㅣ)르르하다

⑫까 마반드(/ㅈㅣ)르르하다

：黒くすべすべしている

上記の複合色彩語のうち、⑩⑫は、子音交替(語基の平音：⑨⑪→濃音：⑩⑫)によって、卑語的ニュアンス(からかう表現)を帯びる。

これらは人間の顔面を描写するときのみ使われる複合色彩語であるが、とくに⑩を使って、特定の人物(もちろん、地肌の黒い人)を描写する場合は、⑨よりも相手をからかうニュアンスが強くなるとも言える。

一方、同じく子音交替によるが、下記の⑭⑯が⑬⑮に比べ、からかうニュアンスを帯びているとはそれほど感じられない。

下記の複合色彩語が⑨～⑫と異なる点は、⑭⑯は母音(語基と接尾辞)が陰性母音であるということである(母音交替による語感の変化は3.1.1.を参照)。

⑬거 무접접하다 ⑭꺼 무접접하다

：(顔が) 浅黒く汚らしい

⑮거 머 번드(/ㅈㅣ)르르하다

⑯꺼 머 번드(/ㅈㅣ)르르하다

：黒くすべすべしている

### 3.1.3. 接頭辞の付加による意味上の違い

微妙な色彩の濃度や彩度を表すために使われている

接頭辞として、「시/ㅅㅣ・새/ㅅㅐ」がある。2章では、これらの接頭辞が付いた色彩語を青山(1966)に従い、2類派生色彩語に分類している。本研究では2類派生色彩語は8語が挙げられている。ただし、注7でも述べているように、韓国語表記法では、色彩語「까망(クロ)」に付けられる接頭辞は、「새/ㅅㅐ」のみであることになる。

しかし、宋(1992)は、「ㅅㅐ/set/・ㅅㅣ/sit/」と「새/se/・시/si/」を、形態上でも、意味上でも区別できると判断されるとして、これらを異形態の関係ではなく、別個の形態素として扱っている。宋(1992:305)では接頭辞の意味関係を以下のように示している。

	明	暗
淡	새	시
濃	ㅅㅐ	ㅅㅣ

ただし、「こういった意味関係は相対的なものであって、絶対的なものではない」とも指摘している。

### 3.1.4. 接尾辞の付加による意味上の違い

3類派生色彩語は、その語形成上の特徴から考えて、色彩語に付いている接尾辞による影響が大きいと言わざるを得ない。3類派生色彩語とは、青山(1966)にも述べられているように、微妙な色彩の状態を表現する色彩語である。3類派生色彩語に付加されている接尾辞は合計22例であり、「까망(クロ)」に付くものは13例もある(これらの接尾辞によって、各派生色彩語の意味が左右される)。

本研究では、このうち、日常よく使われている(韓国語話者の直観)と思われる接尾辞に限ることとする。まず、分析対象の接尾辞は形態的特徴(意味的な側面も考慮したうえ)によって、以下のように分けられる<sup>11)</sup>。

(1)「-웃-」：少し～らしい

→①거(/가)웃하다 ②꺼(/까)웃하다

：黒ずんでいる・浅黒い

(2)「-송-」：まばらな髪・毛

→①검(/감)송하다

：黒みがかった・(ところどころ) 黒っぽい

(3)「-맹맹-/맹맹-」：不調だ/品がない

→①거 무(/가 무)맹맹하다

②꺼 무(/까 무)맹맹하다

：黒く不恰好だ

(4)「-뒹뒹-」：曇っている/濁っている/汚い

→①거 무(/가 무)뒹뒹하다

②꺼 무(/까 무)뒹뒹하다

：汚らしく黒い・薄汚く黒い

(5)「-무트름-」：(顔が) 肥満している

→①거머무트름하다 (>거무트름하다)

②꺼머무트름하다 (>꺼무트름하다)  
: (顔が) 黒くて肉づきがよい

(6) 「-스름-/스레-/레-」: 若干美しい

→①거무(/가무)스름하다

②꺼무(/까무)스름하다

③거무(/가무)스레하다

④꺼무(/까무)스레하다

: 黒ずんでいる・浅黒い

⑤거무(/가무)레하다

⑥꺼무(/까무)레하다

: 黒みがかっている

(7) 「-점점-/잡잡-」: (顔が) 濁っている/賤しい

→①가무(/까무)잡잡하다

②거무(/꺼무)점점하다

: (顔が) 浅黒く汚らしい

(8) 「-죽죽-」: 濁っている/不整だ

→①거무(/가무)죽죽하다

②꺼무(/까무)죽죽하다

: 黒ずんでいて汚らしい・どす黒い

上記の派生色彩語の意味は、基本形色彩語「검다(黒い)」の語基に付加されている接尾辞によって左右される。上記の(1)~(8)までの接尾辞の意味特徴を調べていくと、色彩語「까맣(クロ)」には、主に、こういった意味特徴をもつ接尾辞が付加されているかが分かってくる。

その結果、不快感を表す意味特徴をもつ接尾辞が大半を占めているということが観察された。青山(1966: 358-359)の色彩語と接尾辞との共起関係を表す分類表からも同じ現象が認められた。一方、「하얗(白)」の場合は不快感を表す意味特徴をもつ接尾辞はそれほど付加されないようである。「까맣(クロ)」という色彩を持つ一般的なイメージによって、色彩語に付く接尾辞も相対的に決まってくるのではないかと考えられる。

### 3.2. 文レベルにおける呼応関係

#### 3.2.1. 対象による呼応関係

複合色彩語の語彙構造は相当複雑である。しかし、青山(1966)も指摘したように、その語彙分化の過程は規則的である。

この点に着目し、まず、対象による使い分けを見ていこう。このような場合にも、もちろん、話者の感情がまったく排除されるわけではない。しかし、文脈上での形容対象の違いを調べていくことによって、さまざまな複合色彩語の使い分けを可能にする傾向は分かるだろう。

①갓난아기의 까만/새까만 눈동자가 초롱초롱하다 (赤ちゃんの黒い瞳がきれいに澄んでいる)

②갓난아기의 눈동자가 까맣다/새까맣다 (赤ちゃんの瞳が黒い/真っ黒だ)

③황소의 크고 시꺼먼/시커먼 눈 (黄色い牛の大きくて黒い目)

④황소의 눈이 거멀다/시꺼멀다/시커멀다 (黄色い牛の目が黒い)

①②は「陽性母音」の「黒い」で、①は連体形、②は終止形である。これに対し、③④は「陰性母音」の「黒い」で、③は連体形、④は終止形である。

まず、①②と③④との複合色彩語の使い分けについて考えていこう。①②は赤ちゃんの瞳を形容しており、③④は牛の目を形容している。赤ちゃんは牛に比べると、小さい。陽性母音は小さい対象を、陰性母音は大きい対象を描写するとき、使われるということが言える。すなわち、大きくて重い牛・象などを形容する場合には、一般に陽性母音は使われない。

①②と③④において、子音交替(平音, 濃音, 激音)は形容対象に対する話し手の感情の強調を表すのみで、形容対象の選択にはそれほど影響力は持たない。車(1990)は、陽性母音を含む表現は対象物の「かわいさ, 小ささ, 弱さ」を、陰性母音は「大きさ, 広さ, 強さ」を意味するとしている。

子音交替は形容対象の選択においては、それほど影響は与えていない。ただし、子音交替によって形容対象に対する話し手の感情が若干強調(平音→濃音→激音)される。しかし、母音交替は、形容対象の選択において、大きな影響を及ぼしていると言える。こういった現象は、母音相対法則<sup>12)</sup>と呼ばれている陰性・陽性母音の対立によるものである。対象による呼応関係は、陰性・陽性母音の対立の影響が多いということを証明している。

#### 3.2.2. 状況(場面)による呼応関係

ここでは、複合色彩語の使い分けを、肯定的・否定的状況による呼応関係から考えていきたい<sup>13)</sup>。

①하나코는 오늘 (새)까만 원피스를 입었다더라

②하나코는 오늘 (시)꺼먼 원피스를 입었다더라

: 花子は今日黒い(真っ黒の)ワンピースを着ていたんだって(①は陽性母音, ②は陰性母音)

①②は花子が黒いワンピースを着ている様子を表しているが、話し手の感情は同様ではない。②のほうは、普段話し手が花子に対してよい感情を抱いていないとき、使われる場合が多い。

車(1990)は、陽性母音は「好印象」を、陰性母音は「不快感」を表すと述べている。また、金(1986)は設問調査を通じた実証的な考察によって色彩語の使いかたを調べている。これによると、文脈において、明るい状況を描写する場合は陽性母音を使った派生が起るのに対し、暗い状況を描写する場合は陰性母音を使った派生が起るとされている。このことは、鄭(1938)の母音相対法則と一致していると考えられる。

### 3.3. 使用対象の制限—顔面描写<sup>14)</sup>

- ①가무잡잡하다 ②거무점점하다  
 ③까무잡잡하다 ④꺼무점점하다  
 : (顔が) 浅黒く汚らしい
- ⑤가무무트름하다 ⑥거머무트름하다  
 ⑦까마무트름하다 ⑧꺼머무트름하다  
 : (顔が) 黒くて肉づきがよい
- ⑨가마반드(反지)르르하다  
 ⑩거머번드(反지)르르하다  
 ⑪까마반드(反지)르르하다  
 ⑫꺼머번드(反지)르르하다  
 : 黒くすべすべしている

上記の複合色彩語はその使い方が限られているとされている(朴1985, 鄭1989)。つまり、使用対象が人間の身体部位の中でも、顔(顔の色, 状態など)に限ってしか使えないという制限があるのである。

このことは、色彩語に付いている接尾辞の持つ意味による影響であろうと考えられるので、①~⑩の複合色彩語における接尾辞の意味について調べていく。

①~④の接尾辞「점점/잡잡<sup>15)</sup>」の意味は「(顔が)濁っている」であり、⑤~⑧の「무트름」は「(顔が)肥満している」という意味を有する。⑨⑩の「반드르르/반지르르<sup>16)</sup>」の意味は「つるつる・つやつや」である。

上記の複合色彩語を詳細に分析していく。①~④の複合色彩語は、〈顔の色が濁っている〉という意味特徴を持つ。①と②, ③と④は、それぞれ母音交替(陽性母音/a/→陰性母音/ə/)による違いである。①~④の場合、母音交替は語基と接尾辞とに同時に起る。①②と③④との違いは、語基の子音交替(가→까)にある。前者は平音であり、後者は濃音である。

⑤~⑧の複合色彩語も①~④での変化と同様である。ただし、接尾辞の語形変化は起らない。⑤~⑧の複合色彩語は〈顔に肉が付いている〉という意味特徴を有する。

⑨~⑫は〈顔の色がつるつる・つやつやしている〉という意味特徴を持つ。⑨~⑫の複合色彩語はその変化の仕組みが①~④とまったく同じである。

以上の複合色彩語は、身体部位(顔面)を描写するときのみ使われるという使用対象の制限がある。

### 3.4. 比喩的色彩表現<sup>17)</sup>

- ①\*검게 잊어버리다—直訳: 黒く忘れる  
 ②\*검게 어린 녀석—直訳: 黒く幼いやつ

上記の例文①②は非文である。この例文を意味的に自然な文に成立するためには、それぞれの例文における基本形色彩語「검다(黒い)」を派生色彩語に変えなければならない(文の中での活用は連用形)。

- ③(새)까맣게 잊어버리다 (すっかり忘れる)  
 ④새까맣게 어린 녀석 (青臭すぎるやつ)

このように、派生色彩語からは基本形色彩語(以下、基本形とする)のみでは言い表せない語感が生じてくる。③では「すっかり, まったく(忘れる)」を、④では「かなり, とても(若い)」といった比喩的意味を持つ。こういった意味用法(程度副詞)は、日本語の「赤恥」「赤の他人」における「赤」の意味用法と同様であろう。

- ⑤\*앞길이 검다—直訳: 前途が黒い  
 ⑥\*검게 먼 옛일—直訳: 黒く遠い昔のこと  
 ⑦\*비행기가 검게 높이 뿔다

—直訳: 飛行機が黒く高く飛んでいる

上記の例文⑤~⑦も非文である。この文が比喩的意味を持つためには、③④と同じく派生形を取らなければならない。

- ⑧앞길이 까맣다 (前途が果てしなく遠い)  
 ⑨새까맣게 먼 옛일 (遠い遠い昔のこと)  
 ⑩비행기가 (새)까맣게 높이 뿔다  
 (飛行機がはるか上空を飛んでいる)

上記の例文⑧~⑩における「(새)까맣다(真っ黒だ/黒い)」は、いずれも「はるかに(遠い)」という比喩的色彩表現(意味用法: 程度副詞)となる。車(1990)はこれが転じて、下記の例文⑪のように、さらに「見込みがない」という比喩的意味をも持つと言う。

- ⑪그 사람 만 한 솜씨가 되려면 아직 (새)까맣다

(直訳: 彼ほどの腕前になるにはまだ黒い  
 →彼ほどの腕前にはなれそうにもない)

以上、比喩的色彩表現は基本形では十分に表現できない場合もあるということが言えよう。

以下のような場合もある。

- ⑫그의 검은 속마음을 누가 알겠는가?  
 (彼の黒い腹の中を誰が分かるか)

上記の例文⑫における基本形「검다」は、比喩的色彩表現に使われても不自然さは感じられない。一方、下の例文⑬の場合(終止形, ⑫は連体形)は、非文で

はないが、比喩表現としてはやや物足りなさを覚える。

⑬그의 속마음은 검다 (彼の腹の中は黒い)

上記の例文⑬では基本形「검다」よりは「시커멓다(真っ黒だ)」を使ったほうが、比喩的色彩表現として、より自然である。「새까맣다(真っ黒だ)」も可能であるが、陽性母音/a/は陰性母音/o/に比べ、その語感が強くないという特徴があるので、上述したように、文脈や話者の感情によって、その使い分けは異なる。

以上見てきたように、韓国語色彩語「까맣(クロ)」は、基本形のみでは、比喩的色彩表現としての働きが弱いということが言えよう。換言すれば、比喩的色彩表現によって、より自然な、より頻繁に使われる複合色彩語(とくに、派生色彩語)が存在するということが認められた。上記における比喩的色彩表現を成立させる派生色彩語は、1類・2類派生色彩語であり、とくに、⑬を除いては、比喩的色彩表現には陽性母音による派生色彩語が用いられるという特徴が観察された。

### 3.5. 文語的機能を持つ色彩語

金(1985)は「디/ti/」の付く複合形容詞は「とても～する」という意味を持ち、とくに、色彩語など視覚形容詞によく接続されるとしている。

「디/ti/」が付いて形成された「검디검다(直訳:黒くて黒い)」は、南/高(1993)では文語として、もっともふさわしい表現だと指摘している。しかし、具体的な理由は述べられていない。

以下に、意味的にそれほど差異の見られない複合色彩語を用いて文章(意味は「彼女の黒い瞳/真っ黒な瞳」)を作り、それぞれの文体の違いを調べてみる。

①그녀의 검은 눈동자(基本色彩語:平音・陰)

②그녀의 까만 눈동자

(1類派生色彩語:濃音・陽)

③그녀의 새까만 눈동자(2類:激音・陽)

④그녀의 검디검은<sup>18)</sup> 눈동자(3類:平音・陰)

①～③に比べ、④は口語的表現でなく、小説などで好まれる文語的表現であると考えられる。④は普通の会話ではそれほど使われないからである。ちなみに、韓国語話者(5人)に上記の例文を見せて、より文語的、あるいは文語にふさわしいと思われるものを選んでもらった結果、全員が④を選択した。

## 4. 日本語色彩語「クロ」との対照

### 4.1. 派生色彩語

真っ黒い 浅黒い 薄黒い どう黒い か黒い

日本語で派生色彩語と呼ばれるものは韓国語のそれ

に比べ、はるかに少ない。

ところで、上記の用例を見ていくと、日本語の派生色彩語の数は少ないが、接頭辞(あるいは接頭辞的な成分だと思われる)が付く場合が韓国語色彩語に比べ、多いということである<sup>19)</sup>。韓国語の場合、色彩語に付く接頭辞は、日本語の「まっ」に相当する「시/si/、새/se/」しか存在しない。青山(1966)は、接頭辞が付くことによって、色彩の度合が変わるとしている。

日本語の接頭辞「うす/あさ/どす」の意味に相当する韓国語は、接尾辞として基本形色彩語に付加されている。青山(1966)はこれら接尾辞の付いている韓国語色彩語を色彩の状態を表す3類派生語(本研究では3類派生色彩語と称している)に分類している。

とくに、西尾(1972:89)は、「色を表す形容詞は、評価や感情とは関係ないものが大部分である。」と述べているが、「『どすぐろい』には、『にごったように黒い』というような、単なる色の種類だけではなく、その色あるいはその色を帯びたものに対する、汚いか気味悪いかというような、マイナス的な評価を、語自身に含んでいると考えられる(傍点は筆者)と指摘している。

男はむせる事も、咳する事もできず、苦悶したまゝ、顔は見る見る真黄色になり、どす黒い土色になり、そして皮膚がばさばさと剥げ落ちて行くのである。

(『青銅の基督』55)

さて、「どすぐろい」に相当すると思われる韓国語色彩語を挙げてみよう。青山(1966)はこれらの色の状態を表す色彩語を、「3類派生語」と分類している。

A: ①거무(/가 무)뿤뿤하다

②꺼무(/까 무)뿤뿤하다

B: ①거머무트름하다(>거머트름하다)

②꺼머무트름하다(>꺼머트름하다)

C: ①가 무(/까 무)잡잡하다

②거 무(/꺼 무)접접하다

D: ①거 무(/가 무)죽죽하다

②꺼 무(/까 무)죽죽하다

上記の3類派生色彩語に共通している意味特徴は、「濁っている」ということで、「どすぐろい」の「にごったように黒い」と意味的に類似した面を見せている。韓国語色彩語の場合は、色彩語に付加されている接尾辞によって、色彩語の意味が決まるのである。

一方、西尾(1972)は、「どすぐろい」について、以下のような比喩的な使われかたを挙げているが、ここでの「どすぐろい」は、「黒い」との入れ替えが意味的な面から見て不適切であるとされている。

それに反して黒い翼の流行には、みじんも明るい希望や期待はない。そこにはまがまかしい脅迫と、

どすぐるい呪咀以外のなものもなかった。

〔小説春秋〕1956年2月, 273)

一般に、日本語色彩語には、使用対象に制限のあるものはないと認識されているようである。しかし、派生色彩語「あさぐろい」は使用環境が自由でないと見られる。人間の皮膚にのみ用いられるからである。西尾(1972)も色彩語のなかで、特定の主体のみ制限されているものが少しは見出されるとしている。以下に例文を挙げておく。

その女学生のやうな風をした色の浅黒い女は、ぐんぐん高を引張って二階の高の部屋に入った。

〔冬の宿〕68)

ほかに、色彩語「クロ」から派生したと見られる用例を見てみよう。韓国語色彩語の語彙分化における規則的なパターンは見られないので、意味的側面から考えていきたい。

黒ずむ 黒ます 黒む 黒める  
黒っぽい 黒み 黒さ 黒々<sup>20)</sup>

このうち、「黒ます・黒む・黒める」には「喪服をきる・ごまかす」といった意味も含まれている。こういった意味は、色彩 BLACK に対する否定的イメージによるものではないだろうか。

韓国語色彩語「까맣(クロ)」においても、3類派生色彩語の場合は、主に、「不快感」を表す接尾辞のついているものが多いということが観察された。

#### 4.2. 合成色彩語(色彩語の組み合わせ)

青黒い 赤黒い

色彩語同士を組み合わせた色彩語(韓国語色彩語では、合成色彩語と言う)は、柴田(1982:61)によると、「理論上には十二個(六個と見ることもできる)あるはずであるが、実際には三個しか存在しない」とされている。日本語における合成色彩語(ここでは、このように称する)は、明暗の対立関係を裏から証拠立てられる(柴田1982)と見なされている。これが韓国語色彩語と異なっている点である。

韓国語においては、日本語の「シロ」と「アカ」、  
「シロ」と「クロ」との組み合わせによる合成色彩語が存在している<sup>21)</sup>。韓国語色彩語の体系は日本語とは違って、明暗の対立によるものでないということは明白である(五行思想による)。日本語における色彩語の組み合わせによる2語(青黒い、赤黒い)を、それぞれ韓国語に訳すと、「\*푸르검다(以下、\*は存在しない色彩語を指す)」「\*붉검다」となる。

しかし、韓国語には、このように組み合わせられた合成色彩語は存在しない。韓国語での組み合わせは、「검푸르다(\*黒青い)」「검붉다(\*黒赤い)」とな

る。

つまり、韓国語の場合は、有彩色と無彩色とが組み合わせられるときには、無彩色優先の原則が守られており、有彩色と有彩色が組み合わせられるときには彩度優先の原則(彩度の高い色彩語が先行する)が適用されているのである(鄭1989, 孫1999)。

## 5. おわりに

本研究では、日・韓国語の固有色彩語「クロ：까맣」を取り上げ、考察を行ってきた。

その結果、日・韓国語における色彩語の構造及び語彙分化の違いが明らかになってきた。また、語彙分化による日・韓国語の色彩語の意味用法の特徴が把握できた。とくに、韓国語色彩語において、単純色彩語から派生法・合成法によって作り出された多くの派生・合成色彩語は、単に明度・彩度変化に対する話者の感情をより細かく表すために存在しているわけではない。派生・合成色彩語は、いろんな意味変化をもたらしているということが観察された。

韓国語の派生・合成色彩語(「까맣(クロ)」系列)には単純色彩語とは違って、以下のような位相的变化が見られると言えよう。

- (1) 卑語的に感じられる色彩語がある(3.1.2.)
- (2) 文脈(状況・対象)によって、陰性・陽性母音の選択制限がある(3.2.)
- (3) 使用対象に制限のある色彩語がある(3.3.) (日本語色彩語においても、ある程度適用されよう)
- (4) 比喩的意味用法の働きが強くなる場合が多い(3.4.) (日本語色彩語においても、ある程度適用されよう)
- (5) 文語に、より好まれる色彩語がある(3.5.)

一方、日本語色彩語は合成法・派生法による語彙分化が活発でないため、語彙分化の特徴・対応関係などを探っていく実質的な対照研究(できる限り一対一)は困難であり、こういった研究そのものが否定されるかもしれない。

しかしながら、基本形色彩語(→単純色彩語)からの語彙分化において、日本語とは比べものにならないほどの複雑な韓国語色彩語の特徴を見ていくことによって、①両言語の色彩語の語彙体系の違いが明確になったこと、②両言語の合成色彩語(色彩語同士の組み合わせによるもの)の造語原則が異なること、などが指摘されたことに本研究の意義が与えられよう。

【注】

- 1) 韓国語における基本色彩語の数は、日本語における基本色彩語「アカ・アオ・シロ・クロ（4色）に「キ」を加えた5色である（五行思想による）。
- 2) 孫（1999）は、3つの辞書の調査から、現代韓国語における派生・合成色彩語は401語に上るとしている。一方、日本では、ものの色から由来する色彩語が数多く存在している。これは韓国においても同様である。本研究では、日本語色彩語にそれほど見られない語彙分化による色彩語の派生を考えていくために、ものの色に由来する色彩語の分析は行わないこととする。
- 3) 最近の韓国語色彩語の語彙分化に関する先行研究では（孫1999）、接頭辞・接尾辞の意味特徴の分析から色彩語の微妙な明度・彩度の違いを分類している。既存の研究と程度の差はあるが、結局明度・彩度の差を究明しているのみである。つまり、色彩語を色相の区別体系としてのみ捉えていたからである。このことから、本研究の目的と類似した研究は行われていないと判断される。
- 4) 以下の分類は、羅（1995）の分類法を参考とした。
- 5) 派生色彩語の分類は、青山（1966）を参考にした。
- 6) 接尾辞「말/mat/・말/mət/」の基底型（underlying form）は「알/at/・알/ət/」であるが、本研究では、便宜上、派生色彩語に現れている表面型（surface form）を記しておく。これは姜（1985）による。
- 7) 韓国語表記法では、こういった接頭辞を、鼻音の前では「셋/set/・셋/sit/」、その他の子音の前では「새/se/・시/si/」と表記するように規定されている。しかし、宋（1992）は、「새/se/파랏다」と「셋/set/파랏다」とは、形態上でも、意味上でも区別できると判断されるので、「셋/set/・셋/sit/」と「새/se/・시/si/」とを異形態の関係ではなく、別個の形態素として扱っている。本研究では宋（1992）に従うことにする。
- 8) 韓国語色彩語の語彙分化及び構造に関する研究は、すでに多くの論文がある。参考文献にも幾つかの論文が挙げられている。
- 9) 主に、日常使われる場合が多いと思われる色彩語を対象とする。また、本研究で取り上げられている色彩語（派生色彩語も含めて）すべては一次的に色彩を表す機能を持つものに限る。
- 10) 陰性・陽性母音の対立による語感の差異については、鄭（1938）に詳しい。
- 11) 主に青山（1966）を参考としたうえで、ここに挙

げられていない接尾辞も付け加えておく。

- 12) 母音相対法則は、鄭（1938）の用語。青山（1991）に一部紹介されている。
- 13) 以下の例文①②は金（1986）をもとにした。
- 14) 以下の複合色彩語は、鄭（1989）、朴（1985）、青山（1966）より抜粋。
- 15) ここでは、「잡잡」は接尾辞「접 접」の母音交替（a ⇄ ə）による異形態としておく。
- 16) 「반드르르/반지르르」の品詞は副詞であるが、派生色彩語では、接尾辞的な働きをしている。
- 17) 用例のなかで、⑧～⑩は、車（1990）から引用した。
- 18) 青山（1966）には「검디검다」が触れられていないが、金（1985）、鄭（1989）には言及されている。本研究では、3類派生色彩語として分類しておくこととする。
- 19) このほかにも、日本語色彩語「白」の場合、「ほの白い」「なま白い」がある。
- 20) 韓国語では、日本語の「黒々」に相当する重複形式の色彩語を合成色彩語の1つとして分類する場合もある（羅1995を参照）。
- 21) 희붉다（\*白赤い）、희검다（\*白黒い）。

【参考文献】

—日本語文献—

- 青山秀夫（1966）「朝鮮語の色彩形容詞に就いて」『朝鮮学報』39/40, pp.339-367
- 青山秀夫（1977）「朝鮮語の音声象徴」『言語』6-10, pp.26-33
- 青山秀夫（1991）『朝鮮語象徴語辞典』大学書林
- 菅野裕臣（1986）「オノマトペの響き〈豊かな語彙と音〉」『言語』15-11, pp.54-59
- 佐竹昭廣（1955）「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』24-6, pp.331-347
- 柴田 武（1982）「現代語彙の体系」『現代の語彙』pp.43-66 明治書院
- 車 美愛（1990）「韓国語の色彩表現—日本語との比較の観点から—」『名古屋大学言語学論集』6, pp.1-27
- 西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 野間秀樹（1998）「最もオノマトペが豊かな言語」『言語』27-5, pp.30-34
- 韓国語文献—
- 姜 財遠（1985）「우리말（国語）色彩語 語彙分化研究」全北大学大学院修士論文
- 金 인화（1986）「現代 韓国語의（の）色彩語 研



- 究」梨花女子大学大学院修士論文
- 金宗澤/千時權編 (1971) 『國語意味論』螢雪出版社
- 金 倉燮 (1985) 「視覚形容詞의 (의) 語彙論」『冠嶽語文研究』10, pp.149-176
- 羅 惠淑 (1995) 「우리말 (國語) 色彩語 研究」弘益大学大学院修士論文
- 南기 십/高영 근 (1993) 『標準 國語文法論 改訂版』塔出版社
- 朴 善雨 (1985) 「現代 國語의 (의) 色彩語에 대한 (に対する) 研究」高麗大学大学院修士論文
- 孫 용주 (1999) 『현대 국어 색상어의 형태·의미론적연구 (現代國語色相語の形態・意味論的研究)』東亜文化社
- 宋 철의 (1992) 『國語 派生語形成 研究』太学社
- 鄭 寅承 (1938) 「母音相對法則과 (と) 子音加勢法則」『한글 (ハングル)』6-9
- 鄭 재운 (1989) 『우리말 감각어 연구 (韓國語의 感覺語研究)』한신文化社  
(主任指導教官 町 博光)